

# 故阿仏房讚歎御書

弘安二年三月以降 五八歳

方便現涅槃<sup>に</sup>而実不滅度ととかれて、八月十五夜の満月の雲にかくれてをはするがごとく、  
いまだ滅し給はず候なれば、人こそ雲にへだてられてみまいらせず候とも、月は仏眼・  
仏耳をもつてきこしめし御ら<sup>む</sup>あらむ。其の上故阿仏房は一心想見仏の者なり。あに臨  
終の時釈迦仏を見まいらせ<sup>候</sup>はざ<sup>ら</sup>む。其の上